

新年を迎えて

今月の谷口雅春先生のお言葉

新たに生まれ、いのちを生長させましょう

新生と云うことの本当の意味

たとえば、誰でも年のはじめと云う言葉をきくと何となく嬉しい気がするであります。しかし如何に新年を迎えたからと云って、それが単にカレンダーを一枚めくったと云うだけの意義しかないものであってはならないのであります。またそれが、単に一歳年を老ったと云う意味であつてもならないのであります。それはもつと深い意味をもつたものでなければなりません。古の聖者は「人あらたに生れずば神の国を見ること能わず」と

云われました。新年を迎えると云うことは、新生することであつてこそ尊いのです。ちょうど昨夜眠つて次の朝に目を覚ますと、昨夜の疲れていたときにくらべると、元気は、つらつとして、一層若くなったような気がするでしょう。それと同じように、新年を迎えると云うことは、去年よりも一層元気になって、は、つらつとした気持になり、一層若返つて来て、「何でも出来るぞ」と云うような勇気が、自分の中から湧き出て来るようであればならないのであります。

(新版『真理』第3巻13〜14頁)

毎日を感謝の生活に致しましょう

無論、新年でなくとも、吾々は日に日に新たに生れた若人わこうどのような元氣と、新しい精神と、新しい理想とをもって、毎日の朝々を迎えねばなりません。それはあなたが向上しようとするかぎり絶対に必要なことなのです。しかし何と云いっても、普通の日の毎朝は、昨日のつづきであって、新しく生れたような気持にはなりにくいものなのです。誰でも「来年からはしっかりやるぞ」とか、「来年からはこの悪いくせを改めるぞ」とか、「今年こそは心の日記帳に一つの悪いことも記録しますまい」とか思うのでありますけれども、いつの間にかその決心が失われ、もとのつづきのような、何のへんてつもない、何の希望もない、何の理想もない、ただの惰力だうりきで動いているような無意義な退屈な生活になってしまうのは、惜しいことです。

この新年からは、そんなことのないようにしようでは

ありませんか。毎日がよろこびの生活であり、感激の生活でありたいではありませんか。

(新版『真理』第3巻14〜15頁)

生活に歓びが伴わない根本的原因は何でしょうか

吾々われわれが、よろこびの生活を送ることが出来ないのは何故でしょうか。その根本的原因が何であるかと云いえば、あの古いにしへの聖者の云った「人新たに生れずば神の国を見ること能あたわず」の言葉に尽きるのであります。毎日毎日新たに訪れ、新あたらしき年は、「正月」と云う新よそおらしい装いをつけてあらわれてまいります、いくら容いれものも新あらしくなっても、その中に住む人間が新あらしくならなから、いつまでたっても、新あらしい悦びに満ちた人生が生れて来ないのであります。それでは、「新たに生れる」とはどう云うことでしょうか。ニコデモと云う人は「もうこんなに年を老とつたら再び母親のお腹に入いって新たに生れてくるなどと云うことは出来ないではないか」

と云ったと云うことでありますが、「新たに生れる」とはそんなことではありません。「新たに生れる」とは、「自分自身とは一体どんなものであるか」と云う考えが新らしくなることなのであります。人間を物質の塊かたまりであり、物質の或る成分とある成分とが偶然に適当な温度や湿気の中で集まったら、その化学的作用によって、蚊のポーフラがわいて来るように、人間も、物質の偶然の集まりで生れて来たのであって、人間と云うものには、何も生れた意義も目的もないと云うような「人間」についての考え方をもっている限りは、「人間」であることが楽しい筈はずはありません。「人間」を地球に生いたカビかポーフラのように思っているのでは、毎日毎日の生活に意義も理想もないのは当然のことになります。それどころか「人間」に生れたことが詛のろわしくさえなります。「人間」に吾々を生んでくれた父母が、うらめしくさえなります。それは無理はありません。それで、生れたのだから止むを得ないと云うような、だらしのない生活を送っているのでは、「年」ばかり新年になりまして、楽

しくないのは当然です。人間が本当に楽しくなるには、「人間」は物質の塊ではない。それ以上の素晴らしいものなのだと言ふ新らしい考え方に生れかわらねばなりません。
(新版『真理』第3巻15～16頁)

いのちは伸びており、生長している

いのちと云うものは、肉眼に見える形がありませんから、斯こう云う恰好かっこうということとは言えないのであります。(中略)腕が一本なくなっても「谷口」は「谷口」であり、両脚りょうあしがなくなっても、肉体はどの位減くわつてもいのちが生きている限り谷口は谷口として存続するのであります。そういう風に吾々われわれはいのちであるのですが、いのちは、どんな恰好なのか肉眼には見えないけれども、兎とも角それはあつて永遠に滅びないものであります。そして常に生長しつつあるのです。大人になったら生長しないと考えている人があるかも知れないけれども、そうではないのです。大人になってそれ以上生長しない

心が明るいと生命は伸びる

のは、肉体だけのことであります。大人になっても魂は常に生長しつ々あるのです。毎日吾々は新らしいことを憶え、そして新らしいことを計画し、新らしいのちがそれだけ伸びていって、今日の自分はもう決して昨日の自分ではないのであります。もう今日起きて晴々と天気を見た時にいい気持だと思ったそののちは、昨日それを思わなかったまでののちより、それだけ伸びているのであって、常に吾々ののちは生長しているものです。伸びないのちというものはないのであります。尤も、怠けて寝てばかりおれば伸びるのが遅いのですけれども、それでも生命はその眠っている間にすなわち幾分か伸びるのであります。何らかの新らしい体験が加わります。兎も角、早いか遅いか程度の差こそあれ、何時でも伸びているのであります。生命というものは顕現して来て生長しつ々あるのであります。(新版『真理』第3巻207〜208頁)

伸びると云うことは生命自身の本来の姿であります。生命それ自身に斯くの如くあるように、本来の性質があるのであって、それを抑えることは出来ないのです。伸びることを抑えたら吾々は苦しむのです。伸びるものを抑えられたら、生命が苦しむのは、生命の本来の性質が伸びることにあるからです。吾々は楽しい時にはいのちが伸びている。伸びられないときは、悲しく感じたり、苦しく感じたり、陰気な憂鬱な気持になるわけです。吾々の心と生命とは、互に連鎖反応を起すもので、心が明るいと生命が伸び、生命が伸びると心が明るくなりますが、心が暗いと生命が伸びないし、生命が伸びないと心が暗くなる。どこまで行ってもつづくのです。そこで吾々は出来るだけ楽しく喜ばしく明るく愉快に生きてゆくようにしておりますと、その人は伸びるわけです。常に明るい心を持つ人の生命は伸びるのであります。一時どんな不幸が来ても決して退歩することはないのであります。

(新版『真理』第3巻209頁)